

## 資料紹介

# オスマン・エルギン著 『トルコにおける都市運営の歴史的発展』

## Osman Ergin, “Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı”: An Annotated Translation

(翻訳) 川本 智史  
KAWAMOTO Satoshi

東京外国語大学世界言語社会教育センター  
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Centre

(翻訳) 守田 まどか  
MORITA Madoka

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
Tokyo University of Foreign Studies, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

### キーワード

オスマン帝国 都市 オスマン・エルギン イスタンブル 近代市政

### Keywords

The Ottoman Empire; City; Osman Ergin; Istanbul; Modern Municipal Administration

原稿受理日：2023.2.3.

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.325–338.

## 目次

1. 資料解題
2. 資料訳文

### 1. 資料解題

本稿は、1936年に出版されたオスマン・ヌーリー・エルギンの講演録『トルコにおける都市運営の歴史的発展 *Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı*』<sup>1</sup>に解題を付し、註訳したものである。オスマン帝国における都市運営／行政を論じた講演録全体のうち、本稿では紙幅の関係上最初の十分の一程度を訳出した。残る部分についても、次号以降での刊行を計画しており、最終的には講演録の全訳を予定している。講演録全体の構成は次の通りである。

## 序

はじめに

### 第1部 都市運営における個のシステム

- I 私的奉仕および私的団体
- II 個の事績：イマーレトと文明
- III 個の方式：ワクフと施設
- IV ワクフの国有化：ワクフ省の組織
- V 都市の行政手法：私的支配

### 第2部 トルコにおける少数派の行政手法： 総主教座の特権

### 第3部 都市運営における公共のシステム

- I 街区の行政手法：個から公共への第一歩
- II トルコにおける西洋的方法での市政組織
- III トルコにおける小区組織
- IV トルコにおける村の行政
- V 市と村と特殊団体の統一

<sup>1</sup> Osman Ergin, *Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı* (İstanbul: Cumhuriyet Gazete ve Matbaası, 1936).



なお訳文は、訳者である川本智史と守田まどかの両名が毎週開催した勉強会において下訳の検討を行い、両者の責任において校閲した。

講演録の史料価値を理解するために、まず西アジアの都市研究の現状を知る必要がある。この地域の都市の分析概念としてしばしば用いられるものに「イスラーム都市」があるが、これはフランスによるマグリブ地域の植民地支配の過程でその概念が提唱されたものだった<sup>2</sup>。ヨーロッパ人研究者という他者が、ヨーロッパ都市との比較対象としてこれを分析し、中央アジアからマグリブに及ぶ広い領域にひとつのモデルを当てはめようとするものであった。一方で、現地の研究者たちは概してこのような一般化には冷淡であったことはすでに指摘されている<sup>3</sup>。また「イスラーム都市」論では、その伝統性が強調されるあまり、歴史的な変遷や近代化に十分な目配りがされたとはいえない。

本稿で註訳するエルギンの講演録は、オスマン帝国末期から市行政に携わった行政官が、オスマン帝国における前近代からの都市運営と、トルコ共和国期に至るまでの近代化を自ら分析・解説した点で、きわめてユニークな西アジアの都市に関する論考であるということができる。その主たる考察対象であるオスマン帝国の首都イスタンブルは、伝承によれば紀元前7世紀のメガラ人の植民都市ビュザンティオン創建から始まる世界屈指の歴史都市である。だが同時に、19世紀に入ると加速する近代化政策のなかで、都市行政の改革と都市空間の改造が試みられた近代都市と性格づけることもできる。近代化を目撃した当事者の目で、歴史

的な変遷を物語る講演録は、オリエンタリズムの影響が色濃いかつての「イスラーム都市」論に一石を投じるものであるといえる。他方林佳世子が指摘するように、エルギンによる史料の取り扱いには問題があり、またヨーロッパ都市との比較からオスマン都市の性格を究明しようとする姿勢は、近代的歴史研究以前のものであり、十分に注意を払う必要がある<sup>4</sup>。

講演者のオスマン・ヌーリー・エルギンは、帝国末期からトルコ共和国初期にかけてイスタンブル市役所に奉職した人物である<sup>5</sup>。1883年にアナトリア東部のマラティア近郊で生まれたエルギンは、父とともに若くしてイスタンブルに移り住み、ここで苦学の後1901年に中等教育を終えて市役所で働くようになった。ガラタサライ高校や行政学院のような高級官吏養成校出身者ではないエルギンは組織内での栄達こそ叶わなかったが、在職中も古典的なマドラサや帝国大学文学部で学ぶなど向学心に燃える人物だった。彼は職務の過程で、市役所に保管されていたさまざまな文書に接する機会を持ち、これをテーマ別に集成して解説したのが1914年から刊行が始まった全5巻の資料集『市政全書』である<sup>6</sup>。イスタンブルでは19世紀半ばから都市改造や新たな行政区の設定などが試みられており、『市政全書』はその実態を解き明かす第一級の史料として今日の研究者らによって活用されている。

十分に経験を積み、老練の行政官となったエルギンによる講演は、1936年にイスタンブル大学社会経済研究所での都市行政コースの開設を記念して数日にわたって行われたものである。その内容は都市行政に始まりオスマ

<sup>2</sup> 三浦徹「イスラーム都市研究再考」板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』日本学術振興会、1993、19-23頁。

<sup>3</sup> 羽田正「序章 イスラム都市論の解体」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究 [歴史と展望]』東京大学出版会、1991、10-11頁。

<sup>4</sup> 林佳世子「トルコ」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究 [歴史と展望]』東京大学出版会、1991、170-171頁。

<sup>5</sup> エルギンについては以下の論考も参照。川本智史「ノスタルジックな近代：19世紀イスタンブルの都市空間と都市行政」守川知子編『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』（アジア遊学264）、勉誠出版、2021、241-258頁。

<sup>6</sup> Osman Nuri [Ergin], *Mecelle-i Umûr-u Belediye*, I-V (İstanbul: Arşak Garoyan Matbaası, 1330-1338 [1914-22])

ン帝国時代の音楽や宗教、西洋の都市概念に至るまで実に多岐にわたるもので、時に大きな回り道や哲学的な考察をも含む。またエルギンの講演にはきわめて回りくどい表現が含まれる。これについてはその場の雰囲気をも損なわないよう極力原文に忠実に訳出している。トルコ語原文で括弧記号( )は強調の意味で用いられているため、これはカギ括弧記号「」で訳出した。また日本語訳中の括弧記号( )は、訳者による補足および注記である。

さらに、およそ一世紀前の新生トルコ共和国の人々にとって当たり前だったと考えられる事象も、前近代オスマン都市を研究する訳者たちにとっては未知のことが多い。また講演録の内容からもうかがえるように、エルギンはフランス語にも明るく、都市行政における近代化の最前線で活躍した開明的な人物であった。その一方で、スーフィー教団の修道場にも出入りし、強いシンパシーを抱く伝統的オスマン人としての一面も持ち合わせていた。前近代と近代のはざまに生きた人間がみたオスマン都市と、その発展形であるトルコ共和国の都市とはどのようなものだったのか、講演録の内容を邦訳することは多分野の研究者に資するものであると考えている。

## 2. 資料訳文

### トルコにおける都市運営の歴史的発展

イスタンブール県庁書記 オスマン・エルギン

イスタンブール大学の社会経済研究所<sup>7</sup>で、ひとつのコミュニティー、すなわち都市行政コースの開設を喜びと感謝とともに歓迎します。

トルコの都市の歴史的発展について述べるため、このコースでわざわざかたじけなくも私に機会を与えていただいた本講演では、この発展を確固たるものにするに寄与した都市行政の学術的な進展に言及せずにおくことはできないでしょう。そのため私の講演では都市をテーマとする前に、都市運営、あるいはさらに正確に言えば都市行政<sup>8</sup>の歴史的発展に言及することから始めたいと思います。

都市行政学は、共和国期にはまず1930年に職業研修として、しかしながら簡潔なかたちで、イスタンブール警察学校<sup>9</sup>に採用され、またこの年以降補講のかたちで行政法講義において取り上げられて、行政学校<sup>10</sup>にもあらわれました。しかも1936年に(イスタンブール:括弧内訳註、以下同様)大学でこのコースが設立されるまでに、存在感を増し重要性も大変高まってきました。

講演を始めるに当たって、大学の運営関係者および、尊敬すべき教授方がこの企画をされたことを、喜びと感謝とともに歓迎していることをあえて申し上げる次第でございますが、都市行政を昔から自らの職業とし、雑多ないくつかの著作を記した職業人(エルギン)が、今日この

<sup>7</sup> İktimaiyat ve İktisadiyat Enstitüsü. 前身は1916年にナショナリストで社会学者のズィヤ・ギョカルプ(1876～1924)によって現在のイスタンブール大学文学部に設立された「社会学研究室 İktimaiyat Darülmesaii」で、1933～1934年に改名されて法学部に転属された。İktisat Fakültesi İktimaiyat Enstitüsü Hakkında Kuruluşunun XX.ci Yılı Münasebetile Rapor (1934-1954) (İstanbul: İstanbul Üniversitesi. İktisat ve İktimaiyat Enstitüsü, 1955), 3.

<sup>8</sup> エルギンは都市行政あるいは都市運営に対して、“şehircilik”と“belediyeçilik”という二つの語を充てている。前者は前近代的な都市行政一般を含意し、後者は19世紀半ば以降オスマン帝国でフランスの制度を元に採用された近代的都市行政区 belediye による行政を意味すると考えられる。ここでは区別のため、前者は常に「都市運営」と訳出し、後者は「都市行政」の訳語を充てる。なお belediye については、「市政」「自治体」「市行政」などニュアンスに応じて訳しわけることとする。

<sup>9</sup> オスマン帝国時代の1909年に創設された「帝都警察学校 Dersaadet Polis Mektebi」を前身とする。Recep Akbal, “Osmanlı'dan Cumhuriyet'e Polis Eğitim Tarihi (1845-1938),” *Journal of History and Future*, vol.8, no.1 (2022), 148-169, <https://doi.org/10.21551/jhf.1053706>.

<sup>10</sup> Mülkiye mektebi. 前身は1858年にイスタンブールに設立された行政学校 (Mekteb-i Mülkiyye) で、近代化に必要とされる行政官を養成した。1936年にアンカラに移転され、1950年にはアンカラ大学政治学部へ改組された。Ali Akyıldız, “Mekteb-i Mülkiyye,” *TDV İslâm Ansiklopedisi*, Ek-2 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2019), 238-240.



分野が高みに至ったことを見るような、もっともすばらしい幸運に出会うことがもたらされたので、この私の大胆な試み（講演）が大学の幹部や教授方とともに、若い聴者たちによって好意的に受け止められると信じております。

警察学校で6年間続けられた講義を元に「都市行政知識」として3年間で2度、教科書が印刷されました。これにより講義は警察学校のみならず、我が国の600近くの行政市に散らばった行政学院を卒業した若者たちが学んだ知識は、着任した県や郡を監査監督する上で、多くの業務に益することに疑う余地はありません。

とりわけ、このコースで行われる講演が出版されるという約束と朗報は、都市行政学をこの文化機関（イスタンブール大学）に設置するという、これまでに追求された努力を実現させることに何よりも寄与するため、今回の企画を今一度拍手で歓迎する機会を逃すことは、私にとって不可能に思われます。

手短に次のことを述べた上で、主題に入ろうと思います。

都市行政が、ひとつの仕事、ひとつの学問、そして究極的にはひとつの知識としてトルコに現れたことは、共和国体制とその体制を築いた人々のおかげであります。この分野が継承され、さらに進歩し成熟することを望みます。

発表されたプログラムによれば、私はここでは都市行政についての歴史概説と国際的な発展については話さないことになっています。ここでもっぱらトルコの都市行政について言及し、トルコの都市行政のうちでも、ただオスマン帝国期にさっと目を向けるだけで満足しておこ

うと思います。

あらゆる民族に先立って、中央アジアで巨大な文明が建設され、その文明を世界のあらゆる場所にもたらしたトルコ民族が<sup>11</sup>、イスラーム化よりずっと以前に都市行政制度と都市の建設とその行政手法を発見したということは疑いありません。トルコの歴史、トルコ文明、そしてひっくり返ってトルコ文化<sup>12</sup>に関していまだ光の当てられていない多くの問題を解明する「トルコ史研究委員会」<sup>13</sup>の手になる、待ち望まれた出版物をもって、このことを近く学ぶことでしょう。

オスマン・トルコ人の都市行政組織について述べましょう。

オスマン・トルコ人の行政手法は、旧来のトルコ法のかかなりの部分をとどめるとともに、この手法の重要な点の多くは、彼ら以前に現れては消えたイスラーム諸王朝と変わることがなかったことがわかります。すべての行政官たちの職名が、ヴァーリー（長官）、カドウ（法官）、ムフテシプ（市場監督官）のように、従前のイスラーム国家が使用した語であるように、行政法もシャリーアとそこから導き出したフィクフ（法学）に依拠しています。このように市行政に関する法律や条例もまた、その基礎をシャリーアに置いている「ヒスバ<sup>14</sup>」や「イフティサープ」とよばれる法学書にみることができます。

今日、自治体を誰がどのように運営するのか、都市運営がどのような形で発展したかを理解するために、もっと以前の自治体業務が何かから成り立っていたのかを明白かつ明瞭にしておき、その後この業務が誰によってどのような形で行われたかを研究する必要があります。こ

<sup>11</sup> ここには当時トルコ共和国政府によって歴史理論として採用されていた「トルコ史テーゼ」の強い影響を見ることができ。テーゼは中央アジアから世界各地に拡散したトルコ人が各所で文明を築いたと主張するものである。詳しくは小笠原弘幸の論考を参照。小笠原弘幸「国民史の創成」小笠原弘幸編著『トルコ共和国 国民の創成とその変容』九州大学出版会、2019、21-47頁。

<sup>12</sup> 「歴史 tarih」と「文明 medeniyet」を包含する上位概念として「文化 kültür」を用いている点には注意が必要。

<sup>13</sup> Türk Tarih Tetkik Cemiyeti. オスマン帝国末期から続く知識人グループ「トルコ人の炉辺」内に組織された「トルコ史部会」を前身とし、1931年に改組されてできた組織。1935年にはトルコ歴史協会となった。同書、25頁。

<sup>14</sup> 市場監督官の手引書。

れを行うために、歴史の知られざる一ページを耽読することも、類例を求めてトルコ人以外の民族に目を向ける必要ありません。歴史のどの時代でも、世界のどこかに村、町、あるいは都市が形成され、多くの人がそこにまとまって住んでいれば、その土地の集団に固有の一連の地域運営に対する公共の要求が生じ、これらをそれぞれの方法で確実にやり遂げる必要があることは、今日でも私たちの身の回りに目を向ければ容易に理解できます。

この地域運営と公共の要求は、すべての民族の村や自治体の法において示されているように、私たちの新旧の法律でも制定されています。明文化されていなくても、私たちが暮らす村、町、都市でご周囲に目を向けられれば、また村の長老衆あるいは、町や都市の自治体がいつも行う業務をちょっと思い出されれば、ご自身の経験からお気づきになれましょう。

さて、聴衆の皆さんをうんざりさせないために、言及されている地域運営と公共の需要の主立ったものを、いくつかの項目でまとめてみましょう。

照明と清掃事業、飲食物や燃料の確保、橋・下水道・歩道と公衆便所の建設、学習・休息・観光・集会場所の割り当て、病院・救貧院・ロカンタ（食堂）のような保健・給食・社会支援施設の創設、外国人・往来者・旅行者の滞在場所や快適環境を保障すること、死者の埋葬場所の確保、民衆を被害や危険から守ること、民衆に金銭支援を行う活動を実現すること、などなど。

ご存じのように古今東西、このような業務はすべて政府が自ら行うか、費用は都市住民が負担する形で実施は地域の当局、すなわち自治体に行わせるか、特権と独占を許されて公共の利益に資する株式会社に行わせます。

トルコの都市運営の歴史的発展過程をわかりやすく把握するために、ここではまず1839/1255年のタンズィマート改革以前と、タンズィマート改革以降の二つの時期に分けて分析することとし、タンズィマート改革以前の市政については、これをひとつには「個」のシステム、もうひとつには「集団」のシステムと呼び、タンズィマート以降についてはそれを「公共」のシステムと呼ぶことが適切でしょう。このようにしてトルコの都市運営というテーマを3部構成で分析することとします。

都市運営は「シテ Cité」「ミュニシプ Municipe」「コミュン Commune」という三つの発展段階を経ています。これらのうちトルコ語で「メディーネ」や「シェヒル」と呼ばれるシテはギリシア人たちの時代に、自由ないし特権都市であるミュニシプはローマ人たちの時代に、そして共同統治と言われるコミュンはローマ人以降の諸政権の時代に適用されました。最終的には1789年にフランスの大革命に続いて、コミュン行政がかつて有した権力と権限は剥奪されて、あくまで（権力と権限は）政府が定めた範囲のうちにとどまること、そしてその（政府の）監督下に置かれるという条件の下で、都市に地域や市政の業務にわずかな自由を与えて、これに対して「ミュニシパリテ」と呼ぶようになったことが、世界の自治体の歴史において見受けられます<sup>15</sup>。

この最終形態は、1789年以降、多少の違いとともにすべての政府に採用されたように、70年来私たちも（オスマン帝国で）採用し運用しているということを述べますれば、本学会の主題となりましょう。

しかしこの結論を得るために、6世紀にわたってトルコの都市・地方行政が、時に先述の西洋における4つのシステムのどれに接触し、

<sup>15</sup> ここでエルギンは、ヨーロッパ世界での自治体形成過程をフランス語の用語を用いて整理している。タンズィマート期の都市行政改革がパリのそれを模して行われていたため、分析概念も受容されていたことがうかがわれる。

またどれを受容したのか、またトルコの市行政が西洋から、あるいは東洋からも何を受容したのか、私たちがこの受容したものに何を付け加えたのかを比較しつつ述べたいと思います。

私の講演を最後までお聞きいただけますればお分かりになりますように、我々も学界においてまったく誇りをもって公表できる素晴らしくそして有益な都市行政の手法を有していたと思われる。

これから述べますテーマの多くは、今まで時間不足であったり、あるいは時宜にかなわずして何人によってもくわしく、包括的に、比較の観点から分析されませんでした。分析の多くはまだ印刷あるいは出版されていない文書や資料<sup>16</sup>に依拠しています。

自らの浅学菲才を脇において取り組んだこのテーマの大きさゆえに、ご批判や誹りは免れ得ぬことと思っております。むしろご批判していただければ幸いに存じます。といいますのも、真実の稲妻が意見の衝突によって生じることを存じ上げているからです。

知識とは胸の内(sadır)から文章(satır)へと移されるべきもので、これ(講演録)が皆様によって読まれ、誤りが正されることを願っています。私の講演内容と比較分析にある誤りを正されるであろう学識者の皆様には、ご列席の場で前もって感謝申し上げます。

また次のことも申しておきましょう。私が述べた(都市運営)活動は何世紀にもわたって機能し、ついに過去のものとなったため、今日これらについて自由に議論することは時節にかなっています。こうして今回その機会を得たわけです。

## 第1部

### 都市運営における「個」のシステム＝シテ

## I

### 私的奉仕および私的団体

タンズィマート以前におけるオスマン・トルコ人の市政制度のあり方は、他の場所でその類例を見ないものであり、それは二つの要素から成り立っています。すなわちトルコにおいて、タンズィマート以前の政府は市政業務を自ら行わず、これらの業務をその臣民の裁量に任せたのでありますが、臣民をイスラーム教徒とイスラーム教徒でない者という具合に二つに区分し、イスラーム教徒の市政業務については個人に、非イスラーム教徒の市政業務については集団に担わせたのでした。(非イスラーム教徒の)共同体が担った業務については第二部で検討することにしまして、まずイスラーム教徒の市政業務についてお話ししたいと思います。

そうです、我々の先祖は、イスラーム教徒やトルコ人の地域運営業務のすべてを政府や自治体、あるいは共同体にではなく、個人に、すなわち個人の公徳心や熱意に課したのであり、あるいは個人が自らの意志でこれらの業務のうちのひとつ、あるいはいくつかを担ったのでありました。

行政法学者たちがこのような諸制度に言及する際、地域運営や市政の業務を政府が行う場合には「中央集権的」方法と言い、民衆に担わせる場合には「非中央集権的」方法と言います。しかしながら非中央集権的方法のなかにあって、それらの業務を個人に担わせる方法については一切言及しないのであります。ここでこれから私が説明いたします、この方法を「個の方式」と呼んではいかがでしょうか。もっともこれについては尊敬すべき法学者たちによって分析や議論がなされることを期待すべきでしょう。

この個のシステムについては、イスラームおよびトルコの行政法においてしっかりと検討す

<sup>16</sup> Mehaz. 地図類など文書以外を含む。



る必要があり、今日まで行政法の書物で取り上げられることも、またこのような講演の場で言及の榮にあずかることもありませんでしたので、聴者の皆様のお許しを得てここでやや詳しく述べたいと思います。しかしその説明に入る前に、主題からは逸れますが、一点、皆様に注目していただきたいことがございます。

これから説明いたしますことを皆様がお聞きくださいますれば、(オスマン帝国の)最末期におけるその弊害のために共和国政府によって廃止され、もはや過去のものとして葬り去られてしまった数多くの古びた個の制度のひとつひとつが、創設・活動・有用性という観点から、本来はとても素晴らしく有益な学術的・社会的・経済的、そして無二の制度であったということです。そのうえで、これらの制度がなぜ腐敗し、廃止されるに至ったのかについて、同じ率直さと真摯さをもってご説明したいと思います。先ほど余談として触れたことに、ここでいくつか言葉を付け加えておきましょう。それも必要でしょう。

話を最後まで聞かずして、皆様がよく知らない講演者(エルギン)について、過去を崇拜し、新しいものを避けるような遅れた考えの人だと誤解されませんように。これまで何年にもわたって取り組んで参りましたこのテーマに関して私がこれからお話しすることは、何巻にも及ぶ資料や文書によって証明することができますため、聴者の皆様からの反論や批判に対して、私が冷静に応じられないだろうとお思いになりませんよう。

社会学者や歴史学者、とりわけ自治体史学者に課された役割とは——とくに、こうした講演の場においては——いかなる自治体や社会的組織についてもありのままに説明すること、す

なわち、それらのよい面も悪い面も、やはりあるがままに示すことであります。この世界において、いかなるものも——殊に古いものは——絶対的に、100パーセントよいとか100パーセント悪いと見做せないように、いかなる新しいものについてもやはり、絶対的に、100パーセント悪いとかよいと言うことはできませんし、言うべきではないのです。

廃止され放棄された古い制度にはどれも、悪い側面があったことに疑いはありません。そして(オスマン帝国の)最末期において、その悪い面が増大したために廃止されたのです。しかし、少なくともそれらの制度の創設期においてはよい面もあったこと、そして長期にわたり(社会に)役立ってきたことを認めることは公平でしょう。そこで私もここではこの公平さを示したいと思いますし、皆様にもそうあってほしいと思うのであります<sup>17</sup>。

市政組織(belediye)を説明するために、これまでに列挙しました市行政業務の分析のうち、水なしでは生活は成り立ちませんから、まず水の問題から始めましょう。なぜなら水は、人間にとってと同じように、都市にとっても命だからです。

A

町や都市にとって何よりもまず必要な水は昔から中央政府や市政組織ではなく、「個人」がもたらしていました。他の都市に行って調べる必要はありません。イスタンブルは給水施設の点においてトルコのみならず、全世界の都市の最先端です。本来の市街地から25キロメートル先に作られたいくつものダムから、自然勾配のヴォールトと水道橋による比較的安価な手法でまちへともたらされ、同じ方法でまちの

<sup>17</sup> ここでエルギンは、共和国初期におけるオスマン帝国に対する否定的な見解に異を唱え、是々非々の態度をとる必要性を婉曲に主張しているのである。

中では個人の尽力で作られた何千もの泉や給水所<sup>18</sup>で、民衆に無料で給水された飲料水は、すべて個人の尽力と個人の企画の成果でした。いくつかの泉や給水所では水は雪で冷やされて、民衆にそのように配られることが条件に付されていたことを付記すれば、水の供給問題に向けられた尽力と奉仕の偉大さをよりよく理解できましょう。

イスタンブルの水と給水施設に関して、もっと多くを知りたい方々には、『市政全書』<sup>19</sup>の第1巻と第3巻にある拙稿と、『衛生雑誌』に掲載された、ガリプ・アタ医師<sup>20</sup>の水に関する専論<sup>21</sup>をおすすめします。

水と給水施設に言及するに当たって、昔のトルコ人がこの問題において動物に行った奉仕についても思い起こす必要があります。大型の家畜の飲水のために、泉のそばには家畜用の水場を作って、水が流されていたように、犬、猫、鶏、鳥のような小型の路上動物のためにも家の扉の前には中がくぼんだ石が置かれて、ここはいつもきれいな水で満たされていましたし、この方法で動物たちは簡単に水を飲むことができました。

お話した家畜用の水場は、イスタンブルの再開発されていない古い街区で見ることができます(写真1:トルコ黒海地方のギュミュシュハジュキョイにある家畜水場)。祖先たちが作った給水施設の生活への貢献をひとまず置いておくにしても都市の建設と美化におけるダムや水道橋、泉や給水所の価値と重要性を軽視す



写真1



写真2

ることができましょうか。たとえば今日ここイスタンブルの最も美しい建築作品の中に、泉や給水所をみとめないということがありましょか。アヤソフィア・モスクのそばにあるアフメト3世の泉と給水所に、西洋人たちは「オスマン美術の宝石」という名を与えたではありませんか(写真2:アフメト3世の泉と給水所)。

水と鳥の連想から、私たちのよき慣習を思い出しました。これをお話しないわけにはいきまますまい。建物の装飾のため、そして鳥たちを保護するために、ひさしの下、建物の壁に取り

<sup>18</sup> 人々に無償で水を配給した施設としての給水所は、「(神の)道」を意味する「セビール(sebil)」に由来し、オスマン帝国期の給水所の大部分は、イスタンブル、カイロ、エルサレムに見られる。Nur Urfalıoğlu, “Sebil,” *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol.36 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2009), 249-251. イスタンブルの給水所についての先駆的研究に、İzzet Kumbarcılar, *İstanbul Sebilleri* (İstanbul: Devlet Basımevi, 1938).

<sup>19</sup> 資料解題でも触れたように、西洋諸国との比較の観点からオスマン帝国の都市制度を研究した『市政全書』は全5巻から成る。当時まだ未整理だったオスマン文書が多数収録されている。林佳世子、1991、170-171頁。

<sup>20</sup> 1879年イスタンブル生まれのガリプ・アタ(Galip Ata Ataç, 1879～1947)は、イスタンブルで初等・中等教育を終えた後にドイツ、フランスに留学して医学部を卒業。帰国後は医者としてまた教育者として重要職を歴任した。第一次世界大戦中にはメディナの赤十字病院で内科医院長として医療に従事した。彼が1922年に著した『医学部』は、トルコの医学教育史における重要文献である。Gülay Yıldırım, Selim Kadioğlu, and İlter Uzel, “Galip Ata Ataç’ın “Tıp Fakültesi” Kitabında Yer Alan Osmanlı Dönemi Tıp Eğitimi Tarihçesi Bilgileri,” *C.Ü. Tıp Fakültesi Dergisi*, vol.29, no.4 (2007), 185-191.

<sup>21</sup> Galip Ata, “İstanbul Evkaf Suları”, *Sihhiye Mecmuası*, 16 (1922), 123-127. 本論文は訳者は未見。





写真3

付けられた優美な鳥の巣箱は、この給水施設同様に、今日の動物保護協会<sup>22</sup>の賞賛を絶対に勝ち得るような慈善と慈悲のわざであると思います（写真3：トルコ黒海地方のトカト・ウルジャーミィの鳥の巣箱）。この種の鳥の巣箱の例は、古い石や煉瓦の建物の壁に見られ、たとえばファーティヒ（小区 nâhiye）<sup>23</sup>の国立図書館の上にもあります。

テーマを変えましょう。

## B

教育事業と文化活動が、古今東西において中央政府と大部分は市政組織によって設立・運営されていることに言及する必要はありますまい。今日トルコでは、中等学校以上の文化活動が中央政府によって、また初等学校のそれは市政組織に他ならない、将来必ず市政組織に移管される特殊団体<sup>24</sup>によって運営されているのはご存じでしょう。中央政府にしろ、特殊団

体にしろ、これらの学校の建設と運営のために、毎年人々から数百万もの税が徴収されていることもご覧になっているでしょう。この税金の支払いは、就学児童の有無、国民・外国人の如何にかかわらず、みな平等です。

さりとて、イスタンブルをはじめとする、トルコのあらゆる場所にある数千にも達するマドラサや初等コーラン学校、図書館は、その上にある石に刻まれた建設者の名前からもわかりますように、すべて個人の尽力によるものです。

イスタンブルだけでも、最近になって焼失したり取り壊されたものを除いて、178棟のマドラサ、193棟の学校、147棟の図書館があるということを述べますれば、この都市の古くからの文化活動について統計的な見解をご提示できましょう。

マドラサは、現在中等学校と高校に相当します。スブヤーン・メクテビ<sup>25</sup>は幼稚園と小学校の第1と第2学年に相当します。マドラサには、医学、工学、神学のような高等教育を行う部門もありました。先述の178棟のマドラサには、2300戸の寄宿部屋、63個の教室——本来授業はモスクで行われたためこれは会議室なのですが——そして17の専用図書室があったことも統計が示しています。

その当時、慣行の要求に応じて、それぞれの寄宿部屋にはただひとりの学生が寝起きしていましたから、マドラサには2,300人の学生が寄宿する場所があったことを意味しているわけで

<sup>22</sup> トルコ共和国初期の1924年に法人団体として設立された。その前身は、オスマン帝国末期の1912年に設立されたイスタンブル動物保護協会（İstanbul Himaye-i Hayvanat Cemiyeti）にある。1908年の立憲制復活にともなう西洋化改革の一環としてイスタンブル都市内の野良犬が一扫されると、外国紙でも報道されて厳しい批判を浴びた。こうしたなか、当時ロバート・カレッジで教鞭をとっていた Alice Manning を中心とする動物愛護者たちによって設立された。https://www.thkd.org.tr/hakimizda.php（最終閲覧日2022年9月16日）。動物保護については以下も参照。Ayşe Menteş Gürler, Berfin Melikoğlu, and Şule Osmanağaoğlu, “A Historical Evaluation of Animal Protection Efforts of Non-governmental Organizations in Turkey,” *Kafkas Üniversitesi Veteriner Fakültesi Dergisi*, vol.17, no.6 (2011), 901-908.

<sup>23</sup> 当時のイスタンブルは10の行政区（kaza）から成った。ファーティヒ小区は、城壁内の旧市街地を構成した二つの行政区のうちのひとつ。Osman Nuri Ergin, *İstanbul Şehri Rehberi* (İstanbul: Matbaacılık ve Neşriyat Türk Anonim Şirketi, 1934).

<sup>24</sup> Hususi idareler. 地方自治体の動産・不動産を管理する別の団体として1913年の法令を受けて組織された。Kerim Sarıçelik, *Osmanlı Devleti'nde Vilayet Hususi İdareleri ve Bütçeleri*. (Konya: Çizgi Kitabevi, 2019).

<sup>25</sup> モスクなどに付設され、子供たちにクルアーンの読み方などを教えた学校のこと。

す。それぞれの学生の食事は、マドラサに付属するイマーレト<sup>26</sup>が提供していましたので、これほど多くの学生たちの給食が確保されていたことになるのです。ですがマドラサで学ぶ者たちはどう考えてもこれだけではありませんでした。イスタンブルに家があるか、家族があるか、はたまた他の場所に寝起きする場所がある一部の学生もいたわけで、この数は前者より少ないことはなかったでしょう。(オスマン帝国の)最末期にはマドラサ学生は兵役を免除されたために、学校への志願が増加して学生がずいぶん増えました。(マドラサの)教育、寄宿、給食制度と、兵役免除特権のよい面と悪い面をここで論じることは本題から外れます。これについては教育史研究者が論じるでしょう。

147棟の図書館は合計で20万冊近い写本やすばらしい本を収蔵し、無料で民衆の利用に提供され、付け加えますれば運営水準も高く整えられていたと思います。写本とすばらしい作品に関していえば、イスタンブルは世界の諸都市のなかでも一等賞に輝き、知的世界の比類なき場所として羨望の的になっています。

この都市に147棟の公共で無料の図書館をつくり、ここに20万冊の写本を収めることがどういうことなのか、今一度ご関心と呼び起こし、皆様に少しでも考えていただくために、イスタンブル市役所がこの件(図書館)に関して踏み出した最初の一步についてもこのためにお話しいたします。

以下で、順を追ってお話ししましょう。イスタ

ンブルに西洋型の市政が設立されて80年になりました。この80年のなかで、人々が学ぶための図書館を開館するという着想を得たのは、わずか8年前、イスタンブル県知事で市長のムヒッディーン・ウストウンダー<sup>27</sup>であり、このような図書館(の開設)のために、古いマドラサのひとつで、そちらの、皆さんの向かいにありますバヤズィト・マドラサが、ただちに図書館に転用されるよう示されまして、そうして建物には資金が支給されないかたちで、ただ、書物と本棚、修繕費、その他の必需品、そして博物館部門の物品とあわせて、今日までに8万リラが費やされたのですが、それにもかかわらず、この図書館は8年来開設されず、人々の、とりわけ若い人たちの利用に開放されず、開放され得なかったことをここで申し上げることで、かつて行われていた私的尽力と、共同で行う新たな市政の試みの間に横たわる違いをありありと理解していただけたことと思います。私の申し上げたことを誤解されることがないように、もう少し説明をいたしましょう。

この図書館の欠点を補って一刻も早く開設するために、イスタンブル市役所は——この演壇で公言いたしますが——尽力を惜しまずにやっております。図書館設立に尽力している一人は、世界的名声のあるイスタンブル考古学博物館および付属図書館の創設者に名を連ねる、敬愛すべき国会議員のハリル・エトヘム<sup>28</sup>氏であります。もう一人は、(イスタンブル)大学教授で若手の、敬愛すべきスヘイル・ウンヴェ

<sup>26</sup> マドラサの学生や旅人に食事を提供した慈善施設のこと。詳しくは次の論文を参照。林佳世子「イスラム都市の慈善施設「イマーレト」の生活」『東洋文化』69(1989)、119-144頁。

<sup>27</sup> 1884年、オスマン帝国領のヒオス島(現ギリシア)生まれ。1909年に高等教育機関(Darülfünun; 現イスタンブル大学の前身)の法学部門を卒業。1926年からイスタンブル市長を務める傍ら、1928年からはイスタンブル県副知事も務めた。1930年の地方自治体法によりイスタンブルの県行政と市行政が統合すると、イスタンブル市長と県長を兼ねた(～1938年)。ムヒッディーン・ウストウンダーの生涯と在職時の活動については、Songül Güneş, “Muhittin Memduh Üstündağ'ın Hayatı, İstanbul Valiliği ve Belediye Reisliği (1884-1953)”, M.A. thesis (İstanbul: Medeniyet Üniversitesi, 2020)。

<sup>28</sup> オスマン帝国末期から共和国初期にかけて活動した、トルコ文化史における重要人物。1861年に大宰相イブラヒム・エトヘム・パシャの息子としてイスタンブルに生まれ、中等・高等教育をドイツ、スイス、オーストリアで受けた。トルコ歴史評議会の前身であるオスマン史評議会の会員に選出され(1913年)、トルコ歴史協会の会長に就任するほか(1933年)、ダーリュッシェフアカ(1873年にイスタンブルに開設された無料寄宿学校)の運営にも携わった。Semavi Eyice, “ELDEM, Halil Ethem,” *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol.11 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1995), 18-21。



ル<sup>29</sup>医師であります。敬愛すべき教授は、二年間のうちにたったおひとりで、大学に、こぢんまりとはしているものの大変貴重な医学史の図書館と博物館を開設されました。皆様の前にあります浅学の小生も、図書館設立に尽力している者のひとりであります。公務の勤務時間外でひねり出した、一日のうち少なくとも二、三時間をこの務めに費やし、市役所幹部と一緒に経理問題のうち、支出に関してさまざまな便宜と援助を行っていただきましたが、この8年間のうちに、たったひとつの図書館を人々の利用のために開設することすら成し得なかったというこの困難を、ここで正直に打ち明けておきましょう。そうしますと、それぞれの図書館を個人が独自に設立し、建物も自ら建設し、本も自らの資金で用意するという方法で、この都市には——5世紀という長期間にわたってであったにせよ、あるいはまた、数百冊の書物しか所蔵しない図書館もあったにせよ——147の図書館が設立されたということの偉大さと価値を、今こうして比較することによってご理解いただけたことと思います。我々は私的奉仕によって市政業務を遂行し得た一方で、共同で行うことにはあまり長けていないことを、この例は証明しているのでしょうか。分析に値する問題であります。

別の話題に移りましょう。

C

先ほど挙げました文化活動組織には、その当時において音楽や文学、スポーツ、精神活動の場となり、各々社会的・学術的・身体的な鍛錬のための機構にほかならなかった、イスタンブ

ルだけでもその数が300を超える修道場が含まれているわけでありまして、これら（の修道場の数）を（文化活動組織の中に）含める際に、これら（修道場）もまた、みな個人の企画と私的奉仕の成果であることを思い出していただければ、この務めと尽力の重要性和偉大さをよりよく理解していただけるでしょう。

（オスマン帝国の）最末期になって、大部分が各々、怠惰の家、悪徳の巣と化したために、共和国政府によって閉鎖を余儀なくされた修道場<sup>30</sup>について説明する際に、私の口から出ました、「社会的・学術的・身体的な鍛錬のための機構」という表現にあるいはお気づきになられたでしょうか。もしお気づきでなかったのだしたら、文学や楽器、言葉、さらにはある種のリトミックダンスによって、人々が週に一、二回、美的感性を養ったり知的喜びを味わい、すり減った魂に精神の糧を与える、ヨーロッパ人が「旋回デルヴィーシュ」と呼ぶところのメヴレヴィー教団やカーディリー教団、ベクタシー教団の修道場は、それぞれ音楽、文学、舞踊（といった活動の場であり）、音楽学院、あるいは今日の表現でダンスホールと言うものに他ならないではありませんか。

メヴレヴィー教団の修道場では、ネイ、クデュム、ウッド、タンブル、ケマンといった楽器が、カーディリー教団の修道場ではクデュム、ズィル、テフが、ベクタシー教団の修道場に至ってはあらゆる民衆楽器が演奏されていました<sup>31</sup>。メヴレヴィー教団の修道場では宮廷あるいは東洋音楽、ベクタシー教団の修道場ではトルコ

<sup>29</sup> 1898年イスタンブル生まれ。1920年に医学学校を卒業後、イスタンブルの病院で医師としての活動を始める。1927年からパリに渡り、病院で医療に従事する傍ら、国立図書館でトルコ・イスラーム医学に関する写本を研究した。1930年からイスタンブルの高等教育機関（Darülfünun）の医学部を拠点に研究活動を開始し、1933年には医学史研究所（Tıp Tarihi Enstitüsü）を設立した。生涯を通して膨大な著作を残し、そのテーマは医学はもとより、科学史、文化史、美術史など多岐にわたる。オスマン・エルギン自身がまとめた彼の著作目録もある。Ahmet Güner Sayar, “Ünver, Ahmet Süheyl,” *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol.42 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2012), 350-352.

<sup>30</sup> 脱イスラームを図るトルコ共和国は、1925年9月に神秘主義教団の修道場（テkke）と聖者廟の閉鎖を命じた。新井正美『トルコ近現代史』みすず書房、2001、202頁。

<sup>31</sup> ネイは葦からつくる縦笛、クデュムはばちで叩く二つ一組の小型太鼓、ウッドはリュートの源流とされる弦楽器、タンブルはロングネックの弦楽器、ケマンはバイオリン。ズィルはタンバリン、テフあるいはデフはフレームドラムともよばれる打楽器。関口義人『トルコ音楽の700年』ディスクユニオン、2016、35頁。



あるいは民衆音楽が重んじられていました。ただし、修道僧たちはこれらの楽器に、民衆が与えた名前とは異なった名前をつけることで、楽器に神聖さを付与したのです。葦に穴をあけてつくられた笛の一種であるネイに対してメヴレヴィー教団の人々が与えた神聖さやそれについて詠まれた韻文や散文は、それだけで一冊の本になるほどです。民衆がデュンベレキあるいはチフテナラ（ネッカーレ／ナッカーレ）と呼んだ楽器を<sup>32</sup>、メヴレヴィー教団やカーディリー教団では聖クデュムと呼び、ズィルをハリーレ、その別の種類にはチャルパレ、それからテフについては、大きければマズハル、小さければネヴベと呼んだのでした<sup>33</sup>。

オスマン・セラーハッディン・エフェンディ<sup>34</sup>にまつわる次の説話は大変美しく、ぴったりのものであります。イエニカブ修道場<sup>35</sup>の隣の邸宅では、祝宴のためにジプシーの楽隊が呼ばれて楽しんでいたところ、その楽隊が奏でていたチフテナラ（太鼓）が破れて、場が白けてしまったそうです。楽隊を率いていたジプシーは思いつきました。同じ楽器が、隣のメヴレヴィー教団の修道場にもある、行って頼んでみよう。そう言って、修道場に行き、クデュム奏者長に貸してくれるようお願いしたそうです。しかし、ジプシーは配慮というものを解しなかったために、お願いする際に聖クデュムと言わず、チフテナラと言ったことが、修道僧の癪に障って、ジプシーを叱責したそうです。「これはチフテナラではなく、聖クデュムと言うのだ」と言って、貸さなかったそうです。さらにはシェイフ（長老であるオスマン・セラーハッディン・エフェンディ）のところへ行って、（そのジプシーについて）文

句すら言ったそうです。シェイフは、クデュム奏者長がジプシーに対してとった行動を気に入らず、「（祝宴の）喜びを台無しにせず、貸してあげればよかったものを」と言ったそうです。

「しかし、猊下、聖クデュムをこのジプシーはチフテナラと言うのです」（とクデュム奏者長）。

「問題ではない。ジプシーの手に渡ればチフテナラになるし、また修道場へ戻ってくれば聖クデュムになるのだ」と（シェイフは）言ったのだそうです。クデュム奏者長の無骨さに比べると、シェイフの、真実に即した物言いと繊細さは、いかにも共感が持てるではありませんか。

クデュムを神聖と言うことから、イエニチェリが大鍋を神聖と言うことや、このことに関連してイエニチェリのある逸話を思い出しました。もちろん皆さんも聞いたことがあるでしょう。イエニチェリの一人がモスクで剣を抜き、説教師を襲ったそうです。先生答えてみな、と言ったそうです。神聖な大鍋の方が大きいのか、あるいは聖コーランか、と。さて、説教師はどうしたらいいのでしょうか。神聖な大鍋がもちろん大きい、見てわからんのか、どでかいものだ、と答えて首がつながったのだそうです。

共和国体制はこの種の事々から崇高さをなくし、言論の自由はこのテーマについて自由に議論できるという確信を我々に与えてくれました。専制と狂信の時代において、この種のことに崇高さを認めない人々の身の上に起きたことが（いかなるものか）、おわかりいただけるでしょう。もはやどんなことも、あるがままに見て、あるがままに表現しましょう。

三年前、カール・ヴェット<sup>36</sup>という名のデンマーク人が、スイスから男女混成の音楽団をイ

<sup>32</sup> デュンベレキは花杯型片面太鼓。同書、35頁。

<sup>33</sup> オスマン古典音楽とそこで用いられる楽器については次の論考を参照。林佳世子「トルコ：境域を超えて広がる音楽」山口裕之・橋本雄一編『地球の音楽』東京外国語大学出版会、2022、146-151頁。

<sup>34</sup> Osman Selâhaddin Dede (1820～1887). メヴレヴィー教団の長老。Bayram Ali Kaya, "Osman Selâhaddin Dede," *TDV İslâm Ansiklopedisi*, Ek-2 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2019), 378-379.

<sup>35</sup> イstanbulの市壁のすぐ外側にあった修道場で、当時オスマン・セラーハッディンがシェイフをつとめていた。

<sup>36</sup> Carl Vett (1871～1956). デンマーク人心理学者で1925年にIstanbulの修道場に滞在した。Carl Christian

スタンブルに招致し、都市のあちらこちらで、オルガンやその他の楽器を用いた宗教詩のメロディーにあわせて、リトミックダンスという一連の踊りをさせたところ、男女の踊り手たちの身のこなしが音楽に非常によく調和していて、いくつかの意味深い表現や物腰をとったことに皆が満足しました。このリトミックダンスは西洋由来で教育学的、心理学的（に効果のある）舞踊であるとされるため、アルナヴァトキョイにあるアメリカン・カレッジ<sup>37</sup>で、女学生たちの前で再演されることにも何ら不都合はないとされまして、私もそこで鑑賞したのです。

さりとて、この種のリトミック、つまり調和のとれた踊りは、メヴレヴィー教団、カーディリー教団、ベクタシー教団、そしてとりわけアレヴィー教団にもありました。そのうえ最初期には、メヴレヴィー教団のふたりの男性が互いに絡み合いながら「セマー」<sup>38</sup>と呼ばれる踊りを踊り、後になってこれが放棄されたということを『スイペフサーラルの書』<sup>39</sup>から知っています。カーディリー教団では手と手を取り合って輪になって「ホラ」の踊りをするように、音楽と美しい声の助けを得て、「デヴラン」と呼ばれる勤行を行ったのを私たちは目にしたものです。ベクタシー教団での個々の踊りは、我がトルコの舞踏に他ならぬものでした。またベクタシー教団の修道場には、酩酊性の飲み物まで持ち込んでいたといえます。アレヴィー教団の方とはといえば、男と女が隣り合い、入り交じって行った舞踏やダンスは、完全に我がトルコの踊りと旋律でした。ただし申し添えますと、修道場の人々が楽器の

名前を変えたのと同じように、舞踏のうち、あるものを「セマー」、あるものを「デヴラン」、あるものを「アーイニジェム」と呼びました。三者の違いはその程度です。

さてメヴレヴィー教団が「テンヌーレ」と呼んだ服は、作りの点からも用途の点からも踊り子たちのスカートと異なっていたでしょうか。いいえ、同じでした。

このように見てきましたように、民衆を一カ所に集めるために、楽器や歌の伴奏付きの舞踏が興奮をもたらす効果が利用され、楽器と一緒に美声の持ち主を修道場に連れてくるために、彼らに聖性や宗教的意味づけを与えることが求められました。この修道場の、さらに二種類の貢献を付け加えることができます。一つは、今日民衆文学の最も美しい例として数えられる、何百もの「ネフェス」「カレンデリ」「コシュマ」「デスターン」のような韻文のトルコ語の断片を残し今日に至るまで伝えられる一助となったこと、そして他方は音楽の発展を主導したことでした。東洋音楽の達人たちの最も偉大な者たちは、メヴレヴィー教団の修道場で育てられた者である、ということができます。

ここでいったん振り返ってみましょう。私たちがそのまっただ中にある転換と革命の時代において、ここは重要な交差点なのです。修道場と宗教儀礼を、このように（現代的な意味合いで）とらえ理解することによって、ふたつの強力な異議に直面すると予期しております。このうち一つは、古い修道場のメンバーたちから発せられ、このような見方が神聖さを汚している、と主張するものでしょう。（現代的解釈をすること

Vett (trans. by Elbridge W. Hathaway), *Dervish Diary* (Freiburg: Bridges Publishing, 2007), 8, 206.

<sup>37</sup> 1873年に当初アジア側のユスキュダルに設立されたアメリカン女子カレッジのことか。1863年に設立されたロバート・カレッジを母体とし、イスタンブルの近郊北側アルナヴァトキョイにキャンパスがあった。同所で1971年に男子部と女子部が統合されて、英語授業を行う共学高校のロバート・カレッジに改組された。また大学部局は同年にボアジチ大学に改組された。

<sup>38</sup> 旋回舞踏ともよばれる踊りで、メヴレヴィー教団が実践する宗教儀礼。

<sup>39</sup> ルーム・セルジューク朝宮廷にも仕えたフェリドゥーン・スイペフサーラルによって記された、ルーミーとその弟子たちに関する書。14世紀初めに完成か。Nûrî Şimşekler, "Sipehsâlâr, Ferîdun," *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol.37 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2009), 260.

に) 何の差し障りがあるだろうと聴衆の皆様はおっしゃらないでください。修道場のメンバーたちにも道理があるのです。そこでこの論争に対して、(次のような) 社会学的観点から答えることは可能でしょう。彼らが神聖と見なしたものとを、このように説明することは、彼ら自身と彼らが聖性を認めたものに対して失礼であります。ですがその一方で、彼らもまた、大鍋やデュンベレク、テフ、ネイに認めた栄誉や神聖さが、未永く継続し、そうなるであろうことを自分自身と他者に信じ込ませようと無理強いすることも、学問と良心の自由に対しての無礼と見なしうるでしょう。さりとて社会学的観点からは、この見解の両者は、価値があり重要であります。ですから両者がそれぞれの考えを尊重せねばなりません。のりしり、まくし立て、侮辱し、嘲笑することは絶対にだめです。なぜなら偏見は片方だけではなく、両者にそれがあからずからあります。この種のものごとの神聖さがまだ続いていることと、終末の日までそうあり続けると信じること、そして他者にそう信じさせようと努力することがどれほど強烈な偏見であろうとも、この種の信仰が時代と環境に照らしても全く価値や重要性を失ったと主張することもまた、強烈で悪しき偏見なのです<sup>40</sup>。

今日あるカーディリー教団員に向かって、ベクタシー教団のテッケや宗教集会が、「マクシム」<sup>41</sup>で行われるものとは違わないとおっしゃるのであれば、彼は賛同しましょう。ですがカーディリー教団やメヴレヴィー教団のものと、コンセルヴァトワールで行われるコンサートとは違わないとおっしゃるのであれば、賛成はしてもらえないでしょう。これが偏見なのです。

<sup>40</sup> ここでエルギンは伝統を重んじる神秘主義教団の擁護者と、世俗主義を信奉して教団を攻撃する共和国エリートの両者を、ともに頑迷であると批判している。

<sup>41</sup> 帝国末期から共和国初期にかけてイスタンブールで一世を風靡したナイトクラブ。詳細についてはウラジーミル・アレクサンドロフ著(竹田円訳)『かくしてモスクワの夜はつくられ、ジャズはトルコにもたらされた』白水社、2019。